

『経済学史研究』執筆要綱

(2022年12月)

以下の要綱は、シカゴ・マニュアル (*Chicago Manual of Style*, 15th ed.) を参考にしつつ、従来の『経済学史研究』のスタイルを引き継いで、一層の明確化をはかったものです。『経済学史研究』への投稿をお考えの方は、この要綱に従っての投稿をお願いいたします。

(1) 数字

- ① 原則としてアラビア数字を使用する。(ただし、当該論文の節を指す場合は、「本稿の第II節では」のようにローマ数字を用いるものとする。以下の②を参照のこと。) 数字を連結する場合は、ハイフン (-) ではなくエヌダッシュ (–) を使用する。

第1章、第1節、第1巻、第1に、1箇所、第1論文、1つ、第1次世界大戦

- ② 論文の節分割は、ローマ数字 (I, II, III, IV, ...) で行い、見出しを添える。さらに区分する場合は、アラビア数字 (1, 2, 3, ...) とする。(ただし、英語論文の場合はローマ数字・アラビア数字いずれにもピリオドを添える。)

(2) 句読点

句読点は「, 」 「。」 (いずれも全角) で統一する。

(3) 人名

欧米人名の日本語表記 (カタカナ) については、経済学史学会編『経済思想史辞典』 (丸善) に記載されている場合、原則としてそれに従う。記載例は、下記を参照。

ミル (John Stuart Mill, 1806-1873)

K. E. ボールディング, ケネス・ボールディング

(ケネス・E. ボールディングという形は避ける)

(4) 図表

図表は別ファイルに作成し、本文の該当箇所に [ここに図 1 (または表 1) を挿入] と指示して

おく（ただし、Microsoft Word の描画ツールやグラフツール、表ツールなどを利用してモノクロで作成した図表は、同一ファイル内に配置してよい）。グラフや概念図は、カラーではなくモノクロ、ビットマップデータではなくベクトルデータとする（アドビ社のイラストレーターで書き出した EPS 形式が望ましい）。写真は、300dpi 以上の解像度をもつ TIFF 形式（モノクロ）とする。また、当該図表の下に「表 1 1920 年代の失業率」などと短い題（caption）をつけておく。

(5) 注

注は「脚注」とする。注番号は、1), 2), 3), ...などと振り、「上添え字、片パーレン（丸括弧）、半角」とする。なお、単なる典拠注は、本文の中に入れる（次の項目を参照）。

(6) 引用

原典の省略は「…」（三点中黒、1字分）で示し、欧文での途中省略は「...」（ピリオド3つ）を、末尾の省略は「....」（ピリオド4つ）を用いる。引用者による挿入・改変の断り書き等は、「[]」（角形括弧、全角）で示す。独立した長い引用の場合は、前後を1行あきとし、全体を1字下げ、末尾に出典を明記する。部や章を示す場合は、pt. 1 や chaps. 1-2 のように、part や chapter は省略形で示し、小文字を用いる。以下、具体例を示す。

ここでのマルサスの主張について、羽鳥・中村（2000, 104）は、「…合計価値額が減少したために、労働需要が減少した」と解釈する。

ウィンチ（Winch 1987, 105, 107／訳 108, 110）によれば、マルサスは…

（／は、ファイル上は全角を使用しておく）

「われわれの計画は…逃れさせるようなものではない」（Beveridge 1942, 170-71）。

「為政者がいかなる場合でも手形を平価で与え」（Steuart [1767] 1995 [以下, Works と略記], 2: 461）ることになる。

なお、本文や注の中で同一文献を引用するときには、「ibid.」「op.cit.」「同上」「前出」等は用いない。繰り返し引用する場合は、略称を用いてもよい。この場合、上記のようなかたち（「[以下, Works と略記]」）で略記することを初出の際に明記すること。

(7) 強調

日本語論文では、原則として、アンダーラインではなく圏点（・・・）を用いる。

(8) カタカナ表記における中点の使い方

原綴で単語が切れる箇所には、原則として「・」（中点）を入れる。

ポリティカルエコノミー → ポリティカル・エコノミー
ハイフン付きの単語は、1単語として扱う。

(9) 参考文献表

参考文献表は、本文の末尾に置く。洋書は著者名（姓）のABC順、和書は著者名（姓）の五十音順で分けて並べる。同一著者で同一年に複数ある場合は、年号の後ろに a, b, c, ... をつけて区別する。欧文雑誌名や著作名（単行本扱いのもの）はイタリックで示しておく。詳細は以下の通り。

- ① 著者名・編者名：3人までは全員の名前を表記。それ以上の場合は、外国語文献の場合は「et al.（立体）」を使用することができる（「and others」は用いない）。日本語文献の場合は「他」を使用する。
- ② 日本語論文の副題には、左側のみ「—」（全角ダッシュ）を使用し、右側にはつけない。外国語論文の副題には「:」（コロンの）を使用し、コロンの次の単語は、冠詞であっても大文字とする。
- ③ 英米の雑誌名には、冒頭の冠詞（The）をつけない。
- ④ 版の表示は、2nd ed., 3rd ed. のように表記（second edition, Second Edition, ... は使わない）。
- ⑤ 巻・号数がある場合は、18 (3): 80-101, 号数と頁のみの場合は、3: 10-20 のように示す。
- ⑥ 出版社名では、日本の場合、書房や書店は記載するが、株式会社等は省く。英米出版社名では、Co., Ltd. や Book Company は省略するが、Publishers や Press は表記。冒頭の冠詞（The）は省く。原則として&（アンパサンド）は使用しない。

Clarendon Press

John Wiley and Sons

Kluwer Academic Publishers

McGraw-Hill

Macmillan

MIT Press

Springer-Verlag

University of Chicago Press

岩波書店

勁草書房

社会評論社

- ⑦ 出版地は、原則として都市名のみでの記載とする。ただし、マイナーな都市や町の場合は、州名（国名）等を添えてもよい。Cambridge のように英米ともにある都市の場合は注意。

Basingstoke, Hants: Palgrave Macmillan

Boston: Kluwer Academic Publishers

Cambridge, UK: Cambridge University Press

Cambridge, MA: Harvard University Press

Cheltenham and Northampton: Edward Elgar

Chicago and London: University of Chicago Press

London: George Allen and Unwin

München: C. H. Beck

New York: Oxford University Press

Oxford: Clarendon Press

Paris: Albin Michel

Paris: Presses Universitaires de France

Princeton, NJ: Princeton University Press

Tübingen: J. C. B. Mohl

以下にさまざまな例を示す。

(A) 単行本

Benoit, F.-P. 2006. *Aux origines du libéralisme et du capitalisme en France et en Angleterre*. Paris: Éditions Dalloz.

Brentano, L. 1931. *Mein Leben im Kampf um die soziale Entwicklung Deutschlands*. Jena: E. Diederichs Verlag. 石坂昭雄・太田和宏・加来祥男訳『わが生涯とドイツの社会改革—1844-1931』ミネルヴァ書房, 2007。

Kregs, S., and L. Wenar, eds. 1994. *Hayek on Hayek: An Autobiographic Dialog*. Chicago: University of Chicago Press. 嶋津格訳『ハイエク、ハイエクを語る』名古屋大学出版会, 2000。

Kurz, H. hrsg. 2012. *Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theorie XXVII: Der Einfluss deutschsprachigen wirtschaftswissenschaftlichen Denkens in Japan*. Berlin: Dunker und Humblot.

Meyssonnier, S. 1989. *La Balance et l'horloge: la genèse de la pensée libérale en France au XVIII^e siècle*. Paris: Éditions de la Passion.

Mommsen, W. J., und W. Schwentker, hrsg. 1988. *Max Weber und seine Zeitgenossen*. Göttingen und Zürich: Vandenhoeck und Ruprecht. 鈴木広・米沢和彦・嘉目克彦監訳『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』ミネルヴァ書房, 1994。

植村博恭・磯谷明德・海老塚明. 2007. 『新版 社会経済システムの制度分析—マルクスとケインズを超えて』名古屋大学出版会。

・単行本の一部 (book chapter 等) からの引用

Henderson, W., and W. J. Samuels. 2004. The Etiology of Adam Smith's Division of Labor: Alternative Accounts and Smith's Methodology Applied to Them. In *Essays on the History of Economics*, edited by W. J. Samuelson, K. D. Johnson, and M. Johnson. London and New York: Routledge, 8-89.

羽鳥卓也. 1976. 「『国富論』における生産的労働と蓄積ファンド」経済学史学会編『国富論の成立』岩波書店, 226-50。

・全集等の場合, 初出と異なる版

Steuart, J. [1767] 1995. *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, 2 vols. In *Collected Works of James Steuart*, 7 vols. London: Routledge/Thoemmes Press.

(B) 雑誌論文の場合

・号数と頁のみのもの

羽鳥卓也. 1991. 「マルサスにおける農業主義と商工業主義」『マルサス学会年報』1: 1-20。

・ 巻数, 号数および頁を記載のもの

Okada, M. 2011. Marx versus Walras on Labour Exchange. *Keizaigakushi Kenkyu (History of Economic Thought)* 52(2): 46–62. (『経済学史研究』の英語表記例)

Pullen, J. 1979. Malthus on the Doctrine of Proportions and the Concept of the Optimum. *Austrian Economic Papers* 21(39): 134–54.

小峯 敦. 1995a. 「不確実性下の資産選択—現代金融論からの遡及」『一橋論叢』(一橋大学) 113(6): 121–41. (大学紀要, 副題がある例)

(10) 英文要旨

英文要旨は, 日本語論文・英語論文いずれにおいても頁を独立させ, 末尾に置く。要旨の最後に JEL 分類番号を 3 つ程度添えること。

(11) 謝辞

日本語論文・英語論文とも, 謝辞は冒頭頁の脚注とする。

(12) 欧文論文執筆時の注意

- ① 綴りは, 英語綴りも米語綴りも可。ただし, どちらかに統一すること。
- ② 論文中のラテン語は, 強調する場合を除きイタリック表記としない (例外: *sic*)。

(13) 書評執筆時の注意

- ① 書評における引用頁は, (105) (105–06) のように示す。(105 頁) (105–06 ページ) とはしない。
- ② 参考文献表は用いず, 書評対象書籍以外に参照した文献は割注形式で示す。